

## 中世後期イギリス聖人伝を読む

---

池 上 恵 子

---

### I はじめに

中世ヨーロッパのキリスト教圏に流布したラテン語散文 *Legenda aurea* (黄金伝説：以下 LgA)<sup>1</sup> と称する聖人伝は、1260 年頃にジェノヴァの司教 Jacobus de Voragine によって集大成された。現存する写本は多数あり、今回検討する中英語訳が準拠したフランス語訳のもととなった LgA 写本については問題が残るが、説教の資料として、あるいは修道士たちの教養書として中世ヨーロッパのキリスト教圏で活用されたことに疑いはない。

1438 年に ‘sinful wretch’ (以下 sw) と自称する者が LgA に由来する聖人伝をその中世フランス語訳 *Légende dorée* から後期中英語散文に訳し、*Gilte Legende* (GiL) と呼ばれる。この事実は下記のように Douce 写本の終わりに明記されている。<sup>2</sup>

And also here endith the lives of seintis that is callid in Latynne *Legenda Aurea* and in Englissh the *Gilte Legende*, the which is drawn out of Frensshe into Englissh the yere of oure lorde a .M. .CCCC. and .xxxviiij. bi a synfulle wrecche . . . . (*Gilte Legende*: Bodleian Library, MS Douce 372, f.163vb.)

Richard Hamer, ed., *Gilte Legende*, EETS 3 卷 (2006, 2007, 2012) の完成によって、sw が中英語訳の際に語句および構文等に多様な加筆修正を加え長短の差のある省略を施した事実およびラテン語 LgA との差異も明らかになった。加筆修正の主要な事項は、固有名詞に肩書を加え分かりやすくする、呼び掛けや間投詞などの口語表現および形容詞（句）や副詞（句）を加えて描写を活性化し、構文をおそらく翻訳当時の標準的英語に改める、などである。GiL の使用目的は下記の Harley 写本の冒頭にあるように、聖人伝の基本的目的より具体化されている。

... to excite and stere symple lettrid men and women to encrease in virtue bi the offten redinge and hiringe of this boke. (*Gilte Legende*: British Library MS Harley 4775, f.1.)

本稿では sw の加筆修正を経た中英語後期散文の聖人伝が、どのように読まれたか、読者あるいは読み聞かせの聞き手、とくに上記で対象とされている「平易なレベルの読解力のある男女」すなわち一般平信徒たちは何を読み取ったのかを考察したい。

## II 聖人伝とは

聖人伝は、キリスト教の布教に貢献した実在および架空の人物の「伝記」と理解されている。英語では古英語以来、*St. Guðlac* や *St. Juliana* のような単独の聖人伝（韻文および散文）あるいは数点をまとめた *Ælfric's Lives of Saints* と言われる聖人伝集などが多数存在した。現在なお、残存する聖人伝の探求が継続し、聖人のエスニシティーとともに Hagiography Society ほか中世を対象とする国際学会のテーマとなっている。

中英語期の聖人伝は *South English Legendary* (SEL) [1285-95] [韻文]；*Vernon Minor Poems*, *Vernon Collections* [c.1385] [韻文]；*The Katherine Group* [散文] が主要である。現存する写本および含まれる聖人伝の数の多さから、韻文の SEL が広く用いられていたと推定されるが、GiL が散文であることに注目したい。

GiL 以後のものでは Caxton 訳 *Golden Legend* [1483] [散文] がよく知られているが、本来の LgA にない旧約聖書の聖人を含み、構成・配列は GiL とは

かなり異なる。*The Kalendre of the Newe Legende of Englande* (*Nova Legenda Anglie* の中英語訳) [1516] [散文] は聖人名のアルファベット順で極めて簡略に記述された要覧である。

聖人伝 (集) を表す英語の語彙は、life (lives), legend, hagiography (*OED* : 1821 初出例) などであるが、“*MED*. 1(a) A written account of the life of a saint. c.1380; (b) a collection of saints’ lives. c. 1380. 2(a) An account of saints’ life, or a portion thereof, appointed to be read in a church service. 1387” とともに “*OED* 6a. An unauthentic or non-historical story, esp. one handed down by tradition from early times and popularly regarded as historical. 1613” を挙げておきたい。つまり、宗教改革と理性の時代を迎えて聖人伝への評価が大きく変化したのであるが、GiL が読まれた 15 世紀半ばの受容の実態との関連を問うべきと考える。

Hagiography は *OED* sb.2 の定義によれば、“The writing of the lives of saints; saints’ lives as a branch of literature or legend. 1821” のように、文学の一部とされるが、ラテン語の *legenda* n.pl. の意味は things to be read であり、教化・啓発のために読まれるべき受難記などからの説話と定義される。聖人伝をどのジャンルと扱うのかには議論の余地があるが、本稿では原文を精読して、先ずはその「物語性」を読み取りたい。<sup>3</sup>

聖人伝の構成は教会歴および聖人の記念日 (おもに殉教の日) で配列され、次のように大別できる。

Temporale (教会歴): 降誕、割礼、顕現、七旬節、六旬節、四旬節、大斎節、聖母のお潔め、受胎告知、受難、昇天、聖霊降臨、聖母被昇天、聖母の誕生、待降節。

Sanctorale (聖人伝): 各聖人の生い立ち、活動・奇跡、異教徒の改宗、迫害、病死、拷問、殉教、埋葬、殉教後の奇跡、祠・礼拝堂・教会の設立、移葬 (translation)、移葬先の繁栄。

GiL は、IgA の各章冒頭の聖人名の由来・語源を省く。15 世紀の読者あるいは利用する聖職者たちにとって、こじつけの語源は必要ないと判断されたためと推定する。GiL は、179 章からなり、Temporale 21 章と、162. St. Cecilia (2) が聖人記念日 11 月 22 日で配列上正しく、それと重複する 121. St. Cecilia (1)、および別範疇の 2 章を除く 155 章の Sanctorale を今回の対象とする。

聖人とは初期キリスト教時代以来、キリスト教の布教に貢献して、多くは殉

教し、法王庁によって承認(列聖)されたキリスト教徒の手本となる男女である。その徳により崇敬され、人びとは苦難に際して聖人を介してキリスト・神への執り成しを願い、各種の職業や街の守護聖人となる。聖人全般を見れば、特定の国あるいは地域固有の聖人も少なくないが、LgAに基づく GiL では、そのほとんどが汎ヨーロッパの聖人である。例外はイギリス最初の殉教者と言われる 79. St. Alban (June 22 または 17) で、LgA にはなく別資料から加筆されている。

M. Görlach は、SEL について次のように述べて、当然のこととして平信徒を救いに導く宗教性を強調する。

It is easy for a modern mind to sneer at the simple black-and-white narrative technique, . . . , the lurid details describing the martyrs' sufferings and the straightforward addresses to the audience, but all this criticism overlooks the fact that the *SEL* legends were obviously meant to guide the unlettered to their *sowle hele* . . . . (Görlach, 2011, 14)

しかし、各章の筆頭の聖人の伝記だけでなく、個々の聖人伝に含まれるエピソードに登場する人たちの物語も多数あり、必ずしも徳を備えて手本となる人物のありがたい話に留まらない。

聖人伝の登場人物およびさまざまな場に登場する生き物は、次のように分類できる：

(1) 主要聖人：キリスト（教会歴として語られる）、聖母、使徒、福音史家、大司教、司教、助祭、修道院長、(隠棲) 修道士、その他聖職者、尼僧、王、家臣、各種役人、位の高い女性、一般男女（子供を含む）、とくに未婚の女性。

(2) その他の人物：異教徒（とくに権力者）、(稀に) ユダヤ人、各種職業のキリスト教徒または改宗者、使用人、盗賊、妖術師、悪魔（しばしば女性に化けている）など。

(3) 物語には、各種の生き物も登場する。大別してキリスト教徒を助けるあるいはその生活に関わる生き物は、羊、ロバ、ラクダ、豚、ライオン、鷹、鹿、小鳥などで、キリスト教徒に害を為す動物は、蛇、竜 / ドラゴン、雌ライオン、狼、虎、雄牛、蚊（アブ）、いなご（バッタ）などである。その他に、一角獣、馬、魚、犬、蜂、象なども登場する。

生き物が表す象徴的な意味は聖人伝の論点になり得る。154. St Eustace の冒頭に現れ、以後の体験の預言をする鹿は、角の間に十字架をもちキリストの使者として良く知られている。29. St. Julian の鹿も同様である。竜 / ドラゴンは 87. St. Margaret では人の形をした悪魔、54. St. George では王の娘を喰う悪魔であり、99. St. Martha には、巨大な半獣半魚で鉤爪と翼をもつ姿が描写されている。11. St. Silvester では息を吹きかけて 1 日 1000 人を殺す。竜 / ドラゴンや鹿および 139. St. Jerome に伴うライオンは象徴性をもってしばしば画像にもなる。しかし、GiL では動物の象徴的利用より、物語の日常的描写に登場する場合が多い。66. St. Malchus はサラセン人に捕らわれラクダの世話をする。St. Jerome では、ラクダを連れた異教徒の商人がロバを奪う。これらは実生活を思わせるが、152. Sts. Simon and Jude で語られる 2 頭の人食い虎が主の御名によっておとなしくなった奇跡のように、非現実の譬え話にも動物は登場する。

物語の出来事は多岐にわたる。

(1) 神学論争・異端論争 (7. St. Stephen, 11. St. Sylvester, 16. St. Hilary, 165. St. Catherine 他)；主・神・天使は見えるか見えないか (124. St. Cecilia の夫には天使の姿が見えない；152. Sts. Simon and Jude キリストの顔を描こうとするが光って見えない、キリスト自身が布を取りだし自らの顔を写して渡した)；運命論 (163. St. Clement)；自由意志論 (1. St. Andrew キリストの磔刑はキリストの意志か)；口先だけで神、三位、悔悛を語ることの戒め (145. St. Thais)；最後の審判 (172. St. Agathon)；変容 (107. St Sixte 葡萄酒から主の血への変容)；煉獄、地獄、天国への案内 (48. St. Patrick 罪を犯した Nicholas という男を Patrick が案内し、地面に杖で描いた円が穴となり煉獄へ、天国へは橋を渡る)；聖人の遺骸・聖遺物の移葬または移転 (80. St. John of Baptist)。177. Conception of the Virgin は教会歴の一つであるが、オックスフォード大学で起きた聖母のお浄め不要論への反論が述べられている。

その他 91. St. Nazaren では子どもが父母の宗教の違いを不思議に思う。47. St. Benedict では聖人に対するキリスト教修道士の妬みが語られる。174. St. Pelagius, pope では、イスラム教への言及が詳しい (一ヶ月間日中の断食 (病人は除く)、年 1 回メッカ (Amety's) 巡礼など)。異教徒の宗教儀礼、残酷極まりない拷問の詳細、殉教に到る経緯は多数ある。

(2) 病：ハンセン氏病、麻疹、皮膚の化膿・腫瘍、視力障害、長血、喉の痛み、下痢、死産・流産、手の麻痺、脚の麻痺、首の骨折、太股切断と移

植 (136. Sts. Cosmas and Damian : 癌で太股を失った堂守に、その日死んで埋られたエチオピア人の脚を繋ぐ)、顔が腫れる、味覚を失う、胃弱 (129. St. Chrysostome : 人を招かない理由)、痛風、疫病、死者の蘇生、など。

(3) 事故・天災：溺死、喉に魚の骨・貝を詰める、水難・難破、津波・洪水、火災・放火、物品の破損、水車小屋の破損、盗難、飢餓、日照り、日蝕、水不足 (井戸 / 泉を得る)、落雷、窓から落下、壊れた家の下敷き、落馬、イナゴの大量発生 (作物への害、死骸が岸に打ち上げられ疫病発生)、金山・鉱山での崩落事故、地震、など。

(4) 冤罪 (77. St. Marina を典型とする、若い娘を孕ませたとの訴え)、暴力 (とくに男性 (夫) から女性 (妻) に対する暴力)、誘拐・拉致、(女性の場合) 好まない結婚の強要、捨て子、身売り、男装して家出、三角関係、(誤解による) 殺人、離散と再会、父または母・両親と息子または娘の対立 (信仰の不一致、家の継承)、地位を得るための策略・賄賂・争い、賢い妻の助力、施し (26. St. John Almoner では施しのために聖書を売る)、など。

(5) 建築物の描写、異国への旅、異民族との生活 (砂漠・荒野でラクダを飼う)、煉獄・地獄・天国の描写、道標として道にバラの枝を刺す。

(6) 食べ物：貝、魚、豚肉、大麦パン、小麦パン、果物、野菜 (野草、韭)、ラクダや鹿のミルク、粥、葡萄酒、など。

(7) 職業 (聖職及び王権関係以外) : 織物、鉱山採掘、射手、医者、歌・ダンス・曲芸師、教会音楽 (士)、泥棒・盗賊、など。

### III 物語としての聖人伝

聖人伝のいくつかを具体的に見ていく。聖人の公認されている記念日を付記する。

(1) よく知られている聖人伝には、2. St. Nicholas (Dec.6)、10. St. Thomas, Canterbury (Dec.29)、54. St. George (April 23)、77. St. Marina (Feb. 12)、80. St. John the Baptist (June 24)、94. St. Christopher (Jul. 25)、162. St. Cecilia 2 (Nov. 22)、165. St. Catherine (Nov. 25) などを挙げることが出来る。しかし、一般に知られている本来の筋の他に、複数の奇跡譚を含む場合が多い。たとえば Nicholas では、貧しい家の 3 人の娘の身売りを救っただけでなく、飢饉の町へ送るため小麦を運んでいる者たちに頼み込んで分けてもらい、その小麦は

彼らが届けた先でまったく目減りしていなかった、教会の壁に掛けてくれと女から船員に渡された水を危険と見破り、実はそれは水中でも燃える油 (LgA: *mediakon* 石油) で教会は放火を免れた、ユダヤ人から金を借り、返済の時に騙した男の話、ニコラスの像に留守番を頼んだユダヤ人が泥棒 (おそらくキリスト教徒) に入れられニコラス像をずたずたにしたところ、傷だらけのニコラスが泥棒たちに現れ悔悛させ物品が男に戻った、などのエピソードを含む。

173. *Sts. Barlaam and Josaphat* は仏教説話に源流があり、複雑な経緯でキリスト教ヨーロッパにもたらされ、そこに含まれる寓話への関心から中世ヨーロッパ各地に流布した。異教徒の王子のキリスト教への改宗譚であるが、極めて異色の聖人伝で巻末近くに加えられている。LgA および GiL では8編であるが、ジョージア語版では15、ギリシャ語版でも10編の寓話があった。どの時点で関係をもったのか検討の余地は残るが、「三人の友の話」は道徳寓意劇 *Everyman* と、「四つの箱選び」はシェイクスピアの『ヴェニスの商人』の箱選びの場 (この場合箱は三つ) と同趣向である。また、LgA に採録されたものと思われるが、イエズス会士によって16世紀末の日本にもたらされてローマ字表記で翻訳され、活版印刷のキリシタン文献の一つ『さんとすの御作業のうち抜書』の「貴きさんばるらんとさんじよさはつの御作業」として知られている。

(2) 女性聖人、あるいは聖人伝中に登場する女性の話題は、現代の読者にも関心がありうる。男子修道院に入る父親に男子として連れられていく Marina は、自ら選んで男装したのではない。しかし、86. *St. Theodora* は悪魔の誘惑による不義を悔いて男装し *Theodore* と名乗り男子修道会に入る。Eugenie は127. *Sts. Protus and Hyacinth* に登場し、この聖人伝はほぼ Eugenie の物語であるが、婚姻の夜に男装して修道会へ逃れる。144. *St. Margaret Pelagia* も婚礼の夜に髪を切って自主的に男装し *Pelagien* と名乗る。Marina も含めて、自立し男女平等を志す女性と扱うジェンダー論者もいるが、当時の倫理では処女重視が主要であったと思われる。Cecilia のように婚姻はするが夫との床を拒否する女性も登場し、これはキリストの花嫁という思想が根底にあると言える。とはいえ、当時の女性たちは、これらの聖女の勇敢な行動を密かに喜んだかもしれない。164. *St. Chrysosgonus* に登場の *Anastace* は病と偽って夫から逃げたことを聖人へ書き送る。68. *Sts. Nereus and Achilleus* では、Domycell は夫の暴力で流産し逃れるが、執拗に追いかける夫 Aurelyen は歌い続けて狂い死にする。Marina、Eugenie、Pelagia、Theodora に共通する出来事は、修道院外の



娘が身ごもり、その相手だったと濡れ衣を着せられるが逆らわず子どもを育て、死んで女性と判明することである。125. St. Adrian の若妻は、髪を切り男の衣服を着て他の妻たちとともに獄中の夫やキリスト教徒たちを励ましに行く健気な女性として描かれる。異教徒の学者たちを見事に論破する点で Catherine は優れた女性聖人の代表である。

なお、Marina の他にかけられた冤罪の例は男性にもある。160. St. Brice (Nov. 13) は、St. Martin を妬み讒言し、Martin の後に司教となるが人々の評判は悪い。Brice の下着を洗った女が孕んだと訴えられるが、赤子が彼は父ではないと証言し身の潔白が証明され、修行して Martin 批判を悔いた。

聖人の筆頭は聖母マリアで、人々はさまざまな苦難の執り成しを聖母に願い崇敬する。本稿では Temporale に分類したが、123. Nativity of Virgin には次のようなエピソードがある。ある男が聖母を崇敬し日々祈りを捧げていた。父が死に財産を引き継ぎ、友人たちの勧めで妻を娶ることになった。結婚準備で忙しく祈りを怠ったが、教会の前を通ったとき思い出して聖母に祈ろうとした。そこに聖母が現れ「愚か者、そなたの妻、愛する人である私から離れて別の女を連れてくるのか」と厳しく叱責した。男は悔いて聖母に「決してあなたを見捨てません」と言った。男は友人たちの所へ戻り結婚持続のふりをしたが、深夜に逃げ出し僧院に入り、心を聖母に捧げ尽くして永久の命を得た。聖母が別の女に嫉妬する一般女性であるかのようにも読めてしまう逸話は、当時の信仰規範に抵触しなかったのだろうか。少なくとも、これを読んだあるいは聴いた15世紀の女性たちは、やや言いすぎかもしれないが、マリア様に親近感をいだいたかもしれない。

(3) 物語性の高い聖人伝は以下に取り上げる3章の他にも多数ある。

29. St. Julian (Feb. 12) の冒頭には5人の同名の人物のことが書かれるが、二人目の Julian の物語である。若い日に森で角の間に十字架のある鹿に出会い、いつか父母を殺すと告げられ、怖れて遠い国へ行き貴人に仕え、館を管理する寡婦と結婚する。J の父母は、姿を消した息子を探して国々をまわり、時を経て J の館に辿りつく。J は外出中、J の妻は父母と察して自分の部屋で休ませる。翌朝、妻は早起きして教会へ行く。帰館した J は妻を起こそうとして、妻の寝台に男女が寝ているのを見つけ、妻の不義と誤解して二人を殺す。そこへ妻が戻り、父母が苦勞して J を訪ねてきたことを嬉しく話す。J は失神し鹿のお告げが当たったことを悟る。J は妻の元を去り悔悛の日々を過ごしたいと願うが、



妻は彼に同行し、たくさんの死者が出た荒野に小屋を建て人々を受け容れた。悪天候の夜に助けてくれとの声が出て、Jは川を渡り瀕死の男を家に運び入れ温めた。ハンセン氏病の男は起き上がり、神は二人の悔悛を認め間もなく主の元に安らぐと言ひ姿を消した。

この Julian はチョーサー『カンタベリー物語』総序 I (A) 340 Franklin の箇所、*“S. Julian he was in his contree, patron saint of hospitality”* と、*House of Fame* 1022 に *“Seyn Julyan, too, bon hostel!”* と言及される、Knight Hospitaller の守護聖人である。

66. St. Jerome on St. Malchus は LgA には無い。St. Jerome が語ったという枠の中での物語で、22 行以下 Malchus が一人称で語る体験談である。267 行で Jerome の語りに戻る。

Jerome が老人と老女に出会う。その老人が Malchus なのだ。M は一人息子なので、結婚して家と財産を継ぐことを父に求められ、修道士になることを反対される。家出して、放浪の末シリアの荒野で仲間の修道士と修行するが、ある意図を感じて一旦帰国する。父は死に、母は寡婦となっていた。財産の半分を貧者に寄進し残りで庵を建てたが、主に奉仕せよとの修道院長に従わず僧院を去る。(自己判断の強い性格が語られる。) その後、シリア、トルコの砂漠で異民族サラセン人と暮らす。雇われてラクダの飼育をさせられる。(サラセン人の生活が詳しく語られる。) 詩編を唱えて心の安らぎを得ていた。

雇い主が、ある女を妻にせよと迫る。M は拒むが、従わねば殺すと言われ、その女と洞窟に逃れる。父母の元を去ったことを悔やむ。女とは霊的夫婦として生きると決意するが、雇い主は二人が夫婦になったと思う。数年後修道士たちのことを思い、蟻塚を見て蟻たちが共同して働く姿に感銘を受ける。異教徒の元から脱出を決意し、妻も同行する。牛を 2 頭殺し、食物とし、皮は水を入れる袋とした。袋を膨らませて川を渡し、昼は暑くサラセン人に見つかるので夜間に移動した。ラクダに乗ったサラセン人が追いかけてきたので、洞穴に隠れようとしたが、蛇とサソリが入っていた。ライオンが現れサラセン人を襲い、彼らが残したラクダに乗って 14 日目にローマに辿りついた。メソポタミアの大公にラクダを売り代価を得て修道院へ戻る。修道院長はすでに死んでいたが、修道士たちと暮らした。M は Jerome にこれがその女だと老女を紹介した。

迷いが生じ逃亡や放浪を繰り返す様が鮮明に描写されている。

163. St. Clement (Nov. 23) は 395 行で内容も複雑である。C の父は Faustin 母は Melchiane/Machidiane、双子の兄 Faustin (Aquyl と名乗る) と Faustini (Vicene と名乗る) がいて、C は三男である。

母 M は美しく、夫の弟に言い寄られ、夫の不名誉を怖れて双子の息子たちと国外へ逃れようと思う。夫 F には、ローマから出て行き戻って殺される夢を見たと言げる。F はこれを怖れ、妻と双子をアテネに送る。C は 5 歳で父親の手元に残された。M と双子は海で事故に会い、M は島に流れ着き身体不自由な女性と暮らし、物乞いをしていた。F は M と双子の息子の行方を求めて、アテネに使者を送ったが戻ってこなかったので、C を残して自ら妻たちを探しに行く。

C は 20 歳となり哲学を学び靈魂不滅を知る。St. Peter の同輩の Barnabe と議論し、キリスト教の靈不滅を知り、P の元へ行く。

P が M を訪ね、手仕事をせず物乞いすることを非難するが、M は手が麻痺していると言い、二人の息子に会いたいと海難のことなどを語る。P は魂の不滅を説き、自分の元に居る C が父母について同様なことを語ったという。M は C に会わせてくれと言い、P は M のいる船に C を案内する。母だと名乗るなど言っておいたが、M は C に抱きついた。C は M を狂った女と思ひ撥ねのけるが、P により母だと知る。P は M の手の麻痺を癒やす。

名を変えている双子たち A と V が来て、その女は誰かと聞く。C と P から母だと聞かされ本名を明かす。双子たちは難破の際、別の船に救助され、Iustyne という女に売られ、教育を受けさせてもらった。Symon Magus という魔術師の所へ行ったが、S のまやかに気づき、P の元へ来たのだった。P と 3 人の兄弟は密かな場所へ行き老人に会う。老人は運命と生まれ (出自) がすべてと主張し、神の摂理について議論し、老人を父と呼んだことを非難した。

老人 (実は父 F) は、妻が弟に言い寄ったが弟が拒んだため妻は別の家来を愛したと言う。F はこのことを咎めない、運命だからと言うが、F の言う妻の行動は事実ではない。P は妻と息子たちを見れば運命を信じるかと F に問う。F は妻と 3 人の息子と再会する。

さらにこの物語は複雑で、Symon Magus は自分から去った A と V (つまり双子たち) を憎み、父 F に自分の顔を移す。妻と息子 3 人は、声は F のままなのに SM の顔をした父を避ける。P は F 本人だと知っている。SM はアンテオケで P を貶めようとしていた。P は SM の顔の F をアンテオケに行かせ、P を擁護する演説をさせて P を認めさせた。246 行で偽りの顔が取り除かれる。

PはCを司教とした。

#### (4) 奇跡譚・怪奇譚

宗教上の奇跡は、キリストの起こした奇跡を初めとして、象徴的に理解するのか信仰のレベルで現実と解釈するのか、立場によって異なる。聖人伝には夥しい奇跡が語られる。IgAを読んだ、あるいは聴かされた13世紀の人たちも同様であろうが、15世紀のGiLを読んだ人たちは奇跡譚をどう読み取ったか、あるいはどのように理解すべきと教えられたか、推察の域に留まり課題は残る。しかし読み物としての聖人伝を考えれば、奇跡譚は心躍らされる話であったことに疑いはない。救いを求める人々の願望が形を採るのが奇跡譚の原則であるが、ここでは、いわばミステリー風の怪奇譚を取り上げる。

135. St. Justina (Sept. 26) (170行)の主人公Justinaは異教徒の娘だったがキリスト教に改宗し、父母と自分に恋慕するCiprienも改宗させた。Cは7歳から悪魔によって妖術を学んでいた。Cは悪魔を呼び、Jの心を迷わせ結婚に同意させる方法を問う。悪魔は、Jの家のまわりに油を撒き火を付けてJの欲情をかきたてると言うが、Jが十字を切ったので失敗する。二人目の悪魔も失敗。悪魔の長が呼ばれ、娘に化けてJに近づき、神は地上にキリスト教徒が増えるように生めよ増やせよと言ったという。Jはこの娘は悪魔と気付く。美男子に化けたが見破られる。(ここで話は一旦逸れ、神の罰としてアンテオケに疫病蔓延し死者多数、Jの祈りで疫病収まる。)次に悪魔はJ本人に化け、Jの名を汚しCに近づく。CがJの名を呼ぶとJは消え、Cは悪魔に騙されていたと知る。悪魔に頼れないと思ったCは自ら女や小鳥に化けてJに近づく。雀となってJの窓に近づいたが元の姿に戻ってしまい落下し首の骨を折る。JはCを救助し悪さをしないよう諭す。

悪魔がCを訪ねてきて、Cが十字を切るのが失敗の元だという。十字架に掛かった者が最も強いと知りCは改宗する。(すでにJが改宗させたと冒頭にあるが、効果がなかったのか、この場面を先に述べたのか、聖人伝にはしばしば語りの順序に混乱がある。)Cは司教の座を継ぎ、Jを修道院長とし、各地のキリスト教徒に書簡を送り励ました。しかしJとともにCは捕らわれ斬首、死体は犬に食われ、遺体はのちにローマに運ばれた。

前出の163. St. Clementに登場するSymon Magusの魔術も怪奇譚の一つで

ある。1. St. Andrew (Nov. 30) に登場する悪魔は、美しい女性に化け、司教を誘惑し室内に入れてもらう。女はますます美しさを増した、という表現は司教の心の変化を示す。戸口に巡礼が来る。女は召使いに戸口で三つの問を掛け、答えられたら入れて良いという。問1：神が短時間に行った最大の技は何か？問2：土地の高さが最大の場所は？問3：最高の天国ともっとも深い地獄の距離は？（巡礼の答え1：人々の顔かたちの多様性、2：キリストの身体のある天国。）3を答える前に巡礼は召使いに言った。「そなたを来させた女人に答えさせよ。彼女は一度測ったことがあり、私より良く知っている。天国から地獄に落ちたのだから。」この巡礼が St. Andrew だった。謎かけの例である。

(5) 聖人も迷いをもった人間であることを示す章は既出の 160. St. Brice ほか数章ある。82. St. Leo, Pope は手に接吻した女性に欲情をいだき、悔いて見ずから手を切った。後日聖母によって元に戻る。101. St. Germain では、前非を悔いて財産を貧者に施し、妻を妹とした、と語られる。113. St. Bernard は司教となったのちも悪魔に誘惑された。142. St. Francis (Oct. 14) は初めは商人として無駄な人生を送っていた。167. St. James the Martyr は地上の権力に接近する。174. St. Pelagius, Pope では実在の法皇の悪事が語られる。

## IV 結論と課題

個々の聖人伝は、教会歴で語られるキリストの生涯や聖母関連の章とともに、教理教育の役割を果たした。それとともに、聖人伝を読んだ、あるいは聴いた聖職者とくに下級聖職者や当時読む能力が広まっていた一般平信徒たちにとって、聖人伝が語る物語は、手本となる聖人の生き方をありがたく思うだけではなかったと思われる。多様なエピソードで語られる事柄や登場人物の経験を、自らの体験と重ねて卑近なことと読み取り、それによって人間の逃れられない罪や災いを思い、顧みて悔い改めた人々もいたであろう。のちに聖人となる人たちにも罪から逃れられない経験があるという記述も救いの恵みを教えている。

それとともに物語性の高い聖人伝は、読み物として楽しめたであろう。怪奇な奇跡譚は、それそのものが娯楽読物になり得たのではないだろうか。伝記文学の原型とも言えるが、実在の人物の場合も虚構に満ちたフィクションなのである。現代人は宗教書と娯楽性をもつ誇張に満ちた物語を単純な二項対立で扱

うかもしれない。しかし、15 世紀半ば、すでに理性の時代が近づいていたとしても、GiL は読んで楽しむ要素を十分にもちつつ、宗教文書としての本来の目的に叶うものであったと読み取りたい。聖人伝は宗教書なのか、どのジャンルの文学なのかなど問われるが、そもそも文学とは何か、聖人伝はそれを考えさせる。<sup>4</sup>

GiL は後期中英語の散文文体および語彙を知る貴重な資料である。説教文学、ロマンス、民間伝承等々の関連分野との比較も考察の対象となりうる。

## 注

本稿は 2017 年 12 月 16 日立教英米文学会講演会の口頭発表に加筆修正したものである。

<sup>1</sup> 刊本書名ではなく文献を表す場合も、便宜上イタリックスを用いる。略記は立体で示す。聖人名は GiL の各章タイトルの表記を用いる。聖人伝中の人名は異綴りが多いが、本文中の表記を用いる。

<sup>2</sup> GiL の現存写本は下記である。

Bodleian, Douce 372; BL Egerton 876; BL Harley 630; BL Harley 4775; Southwell Cathedral VII 以上 5 写本と追加聖人伝を含む AAL と略記される 3 写本 BL Additional 11565 (A1); BL Additional 35298 (A2); Lambeth 72 (L) 計 8 写本；その他 Gloucester Cathedral XII; Trinity College, Dublin 319; Takamiya 45.17; Paris nouv.acq. lat.3075 [table of contents]; Trinity College, Cambridge 0.9.1; Corpus Christi College, Cambridge 142 など程度の差のある断簡数点。St. Andrew (30 Dec.) に始まり Advent (待降節) までは 176 章に配置。

AAL: イギリス出身あるいは関連の強い聖人を追加。主要文献 R. Hamer and V. Russel, ed., *Supplementary Lives* 参照。

SEL および Vernon Collections の写本は下記である。

*South English Legendary* (SEL) [韻文] [1285~95]

Bodleian, Laud Misc. 108, BL Harley 2277, Bodleian, Ashmole 43, Corpus Christi College, Cambridge 145, BL Cotton Julius D IX, Lambeth Palace 223, 等 25 写本 + フラグメント 19、他 18 点；Circumcision (1 Jan.) (割礼) に始まり、St. Thomas Becket (29 Dec.) で終わる。イギリスの聖人を含む。

*Vernon Collections* [c.1385] Bodleian, Oxford, MS Eng. poet. a.1 [韻文]

- <sup>3</sup> 聖人伝の読みに関するいくつかの論を取り上げておく。

Critical exposition of individual works may take issue with the labels they have been given and many essays have been written which consist essentially of the author arguing that though *x* is usually called a romance, it demonstrably fulfils the criteria for some other category, whether it be saint's life, parable, folk tale, saga, family myth or something else. But in order to appreciate an individual medieval work one must read it, and to read it one must find it, and finding it usually means looking it up under a generic heading in order to locate an edition: . . . . Genre labelling is thus associated with approximation: . . . . It is therefore not surprising that modern discussion of medieval genres has consisted often of expressions of irritation at the lack of a regulated scheme and attempts to negotiate more precise terms. (Davenport, 2004, 24) [下線筆者：以下同様] この時点でGiLはそのほぼ全編が写本に留まり議論の対象とはなっていない。以下のPickeringの論も対象はSELである。

But if the *SEL* lives are not sermons, what was their function? Why were they written, in English verse, and for what audience? . . . . Like a number of modern *SEL* scholars I do not believe it likely that the collection was written to provide oral instruction for the illiterate laity. (Pickering, 1996, 4)

It is also unlikely that the *SEL* lives were written as a source book for preachers, mendicant or otherwise, for it is clear that they are conscious literary compositions, not simply material to be broken up in a preacher's mouth. (Pickering, 1996, 5)

- <sup>4</sup> 次のコメントは、GiLの散文聖人伝の一部を対象としている。

Thus although prose saints' lives can be discussed without difficulty as a distinct Middle English compositional genre, it must be borne in mind that they were not always copied (or read) separately from other religious writings. (Pickering, 2004, 250)

すなわち、宗教文献なのか、別の機能をもつのかに触れている。しかし、「娯楽性」には、次のように Annie Samson を引用し romance に求める要素を聖人伝ももつことに言及するに留まる。

In 1986 Annie Samson, without differentiating successive stages of composition, suggested that the *SEL* was written for "a relatively informed, cultured readership with considerable breadth of interest", a readership which

also enjoyed the more sensational elements of the saints' lives, in effect the same readership which was at the time demanding romance literature in the vernacular. (Pickering, 1996, 13)

### 主要文献

- Hamer, Richard, ed. *Three Lives from the Gilte Legende* (Middle English Texts, 9). Heidelberg, 1978.
- Hamer, Richard, and Vida Russell, eds. *Gilte Legende*, Vol.I. EETS 327 (2006); Vol. II EETS 328 (2007); Vol. III EETS 339 (2012).
- , eds. *Supplementary Lives in Some Manuscripts of Gilte Legende*, EETS 315 (2000).
- Dunn-Lardeau, Brenda, ed. *Jacque de Voragine: La légend dorée: Edition critique, dans la révision de 1476 par Jean Batallier, d'après la traduction de Jean de Vignay (1333-1348) de la Legenda aurea (c. 1261-1266)*. Champion, 1997.
- Graesse, Theodor, J. G., ed. *Jacobi a Voragine Legenda Aurea vulgo Historia Lombardica dicta ad optimorum librorum fidem recensuit*, 1<sup>st</sup> edn. Dresden, 1846; reproduction phototypica. Zeller, 1965, 1969.
- Ryan, William Granger, trans. *Jacobus de Voragine: The Golden Legend, Readings in the Saints*, 2 vols. Princeton UP, 1993.

### 関連文献

- Görlach, Manfred. *East Midland Revision of the South English Legendary: a Selection from MS C.U.L.Add.3039*. Universitätsverlag Winter, 1976.
- , *The Kalendre of the Neue Legende of Englande ed. from Pynson's Printed Edition, 1516*. Winter, 1994.
- Ikegami, K. *Barlaam and Josaphat: a Transcription of MS Egerton 876 with Notes, Glossary and Comparative Study of the Middle English and Japanese Versions*. AMS, 1999.
- Ono, S., and J. Scahill, eds. with K. Ikegami, T. Kubouchi, H. Tanabe, K. Nakamura, S. Shimazaki, and K. Kano. *The Katherine Group: A Three-Manuscript Parallel Text: Seinte Katerine, Seinte Marherete, Seinte Iuliene, and Hali Meidhad, with*



*Wordlist* (Studies in English Medieval Language and Literature, 32). Peter Lang, 2011.

### 参考文献

- Brown, Peter, ed. *A Companion to Middle English Literature and Culture, c. 1350-c. 1500*. Wiley-Blackwell, 2007.
- Coleman, Joyce. *Public Reading and the Reading Public in Late Medieval England and France*. Cambridge UP, 1996.
- Davenport, Tony. *Medieval Narrative: An Introduction*. Oxford UP, 2004.
- Edwards, A. S. G., ed. *A Companion to Middle English Prose*. D. S. Brewer, 2004.
- Erler, Mary C. *Women, Reading, and Piety in Late Medieval England*. Cambridge UP, 2002.
- Görlach, Manfred. *The Textual Tradition of the South English Legendary* (Leeds Texts and Monographs, New Series 6). Leeds, 1974.
- . *Studies in Middle English Saints' Legends* (Anglistische Forschungen, 257). Universitätsverlag Carl Winter, 1998.
- . "Medieval English Legends: The Form and Development of a Genre," *ERA, New Series* Vol. 28, Nos. 1&2. The English Research Association of Hiroshima, Department of English, Hiroshima University, 2011, pp. 1-22.
- Pickering, O. S. "The *South English Legendary*: Teaching or Preaching?" *Poetica* 45. 1996, pp. 1-14.
- . "Saints Lives," in Edwards, pp. 249-70.
- Spencer, H. Leith. *English Preaching in the Late Middle Ages*. Clarendon Press, 1993.
- Wogan-Browne, Jocelyn, Nicholas Watson, Andrew Taylor, Ruth Evans, eds. *The Idea of the Vernacular: An Anthology of Middle English Literary Theory, 1280-1520*. The Penn State UP, 1999. Esp. Part Four: Five Essays, pp. 313-378.
- The Middle English Dictionary*: <http://quod.lib.umich.edu/m/med/>; H. Kurath, S. M. Kuhn et al., eds., U of Michigan P, 1952-2001. (Printed)
- The Oxford English Dictionary*. J. A. H. Murray et. al., eds., Oxford UP, 1933. (Printed)